

パトモスのヨハネの靈的經驗

ヨハネの黙示録 1 : 9 - 19



司祭 ヨハネ 井田 泉

2019年4月28

復活節第2主日

奈良基督教会にて

先週は主の復活を祝うイースターの礼拝をささげました。今日は復活節第2主日です。この日の使徒書として、新約聖書の最後の書物、ヨハネの黙示録の第1章が読まれました。なぜこの日に、黙示録の初めの箇所が読まれるのか。おそらくそれは、ここに復活の主イエスが力強く姿を現しておられるからです。

言い伝えによれば、主イエスの十二使徒の一人であるヨハネは、福音の伝道の生涯の晩年、捕らえられて地中海の東北部、エーゲ海に浮かぶパトモスという島に幽閉された。そこで彼は神さまから幻（ビジョン）を示されてこの黙示録を書いた、と言われます。わたし自身は、使徒ヨハネと黙示録のヨハネは別人であろうと思っているのですが、その議論には触れません。

「わたしは、あなたがたの兄弟であり、共にイエスと結ばれて、その苦難、支配、忍耐にあずかっているヨハネである。わたしは、神の言葉とイエスの証しのゆえに、パトモスと呼ばれる島にいた。」ヨハネの黙示録 1:9

ここでヨハネは力強く語り始めます。ギリシア語原典を見ると、「わたしヨハネ」あるいは「わたしはヨハネ」と、いきなりこの二つの単語で始まっています。わたしヨハネはあなたがたの兄弟である。「兄弟」というのは強い結びつきを示しています。ヨハネは体は引き離されてパトモス島に閉じ込められており、教会の人々はそれぞれの場所にいる。しかしヨハネは教会の信徒のために祈り、信徒はヨハネのことを心配して祈っている。祈りにおいて共にイエスと結ばれています。迫害の中で苦しみ

を負わされたヨハネは、イエスの受けられた苦難、イエスの広められた神の国、イエスの忍ばれた忍耐と結び合わされています。

「わたしは、神の言葉とイエスの証しのゆえに、パトモスと
呼ばれる島にいた。」 1:9

神の言葉を心に受け、神の言葉を語ったがゆえに、イエスに従い、イエスの生涯と死と復活を命をかけて宣べ伝えたがゆえに、ヨハネはこのパトモス島に流刑の身となっているのです。

ここで「パトモス」について、個人的な思い出を少しお話しさせていただきます。

今からおよそ 200 年前のドイツに、ヘルダーリンという詩人がいました。彼ヘルダーリンは牧師の子であり、彼もまた牧師になることを志してテュービンゲン大学の神学部で学びました。けれどもある事情から牧師への道を捨て、家庭教師をしながら詩人として生きる道を選んだ人です。

今から 15 年前（2004 年）の夏の終わり、わたしは京都の北大路 からすま 鳥丸の近くの大垣書店という本屋に行き、岩波文庫の棚を眺めていました。ふと『ヘルダーリン詩集』というのが目にとまりました。ヘルダーリンという名前は学生時代から気になる名前だったのです。もう 50 年も前になるのでしょうか。わたしの学生時代には少し大きい本屋に行くと哲学の全集、著作集などがずらりと並んでいて、ハイデッガー選集の中に『ヘルダーリンの詩の解明』というのがある、何か惹かれるものがあったの

です。

さてその大垣書店で『ヘルダーリン詩集』を手にしてページをめくっていると「パトモス」という文字が飛び込んできました。ひょっとしてこれはヨハネの黙示録のあのパトモスなのだろうか。「パトモス」というタイトルの詩です。

「神は近い。しかもとらえがたい……」

「泉に富んだ キュプロスや その他もろもろの島のように
輝かしくはないパトモスながら。」

「島は嘆きを聞く……」

「そのようにこの島は かつていつくしんだのだ 神に愛された預言者を。」

他の島々のように輝かしくはないパトモス。しかしこのパトモスの島はだれかの嘆きを聞いている、というのです。嘆きつつ祈るその人の嘆きを、この島は聞いた。

「そのようにこの島は かつていつくしんだのだ 神に愛された預言者を。」

もうはっきりしました。「神に愛された預言者」とは黙示録のヨハネです。ヘルダーリンはヨハネの流刑の島、パトモスを歌っていたのです。もちろんこの詩集を買いました。

この詩を読んで心を動かされたわたしは、翌日河原町の丸善に行き、ヘルダーリンのドイツ語詩集を探しました。「パトモス」が載っていれば買おうと思ったのです。見つかった詩集を長い間ページを繰って、ようやく"PATMOS"を見つけました。

冒頭はこうです。

Nah ist

近い

Und schwer zu fassen der Gott,

しかもとらえがたい 神は。

Wo aber Gefahr ist, wächst

しかし危険のあるところ、

そこに育つ、

Das Rettende auch.

救いの力もまた。

ヘルダーリンは、ヨハネのことを「神に愛された預言者」と呼び、この島パトモスが彼をいつくしんだ、と歌いました。ヘルダーリンのことはこれくらいにして聖書に戻ります。

ある日曜日、パトモスのヨハネはひとり祈っていました。自分のためにも祈ったでしょうが、それ以上に、自分の愛する教会、大切な信徒のことを心配して切に祈っていたでしょう。するとそのうちに、ヨハネは特別な力に包まれ、経験したことのない不思議な世界の中に自分がいるのを感じました。神がここにおられるのをありありと感ずるのです。そのとき、後ろから大きな声が聞こえました。

「あなたの見ていることを巻物に書いて、エフェソ、スミルナ、……の七つの教会に送れ。」 1:11

ヨハネが振り向くと、「七つの金の燭台が見え、燭台の中央には、人の子のような方がおり、足まで届く衣を着て、胸には金の帯を締めておられた。」 1:12-13

彼が間近に見たのは、すべてにまさる力と権威を帯びた王なるイエスです。恐怖に襲われたヨハネは、その方の足もとに倒

れて、死んだようになってしまいました。

「すると、その方は右手をわたしの上に置いて言われた。『恐れるな。わたしは最初の者にして最後の者、また生きている者である。一度は死んだが、見よ、世々限りなく生きて、死と陰府の鍵を持っている。』」 1:17-18

この上なく恐ろしく感じられたその方イエスは、この上なく優しいイエスでした。その方の右手がヨハネの頭、肩

、背中に置かれたとき、彼はこれまで経験したことのない慰めと安心と、励ましを受けたのです。彼はこの復活のイエスから、見たこと、今あること、今後起ころうとしていることを書き留めるように命じられます。

やがてヨハネは体は地上、流刑の地パトモスにありながら、霊においては天に上げられて、天上で行われている礼拝を目撃することになります (4:1-)。彼が天上で見たこと、聞いたことは、やがて地上の人々を励まし導くことになるのです。

パトモスのヨハネは人間の範囲を超えた言わば霊的経験を与えられました。これは単なる人間的な感情の高揚によるものではありません。ここに大切にしたいことがあります。

第1に、ヨハネは神の言葉とイエスの証しのゆえに苦しみを受け、捕らえられて島流しにされた人だったということです。苦しみについてヨハネはイエスと一つになったのです。

第2に、ひどい状態、絶望的な状態でなお彼は祈っていたということです。たとえ一人となっても彼は主日の礼拝をやめませんでした。

第3に、主の日に、つまりイエスの復活の記念日に、復活の主が彼のために現れてくださったことです。

わたしたちは何らかの霊的経験をしたことがあるでしょうか。これは神さまの領域に関わることですから、安易に問うたり答えたりすることははばかれます。けれどもわたしたちはこれまでの信仰の生活のレベルから一歩前に踏み出したい。何も劇的な神秘体験をする必要はないのです。しかし、聖書の言葉に動かされる経験をしたい。神と出会う経験、イエスさまと出会う確かな経験をしたい。それがわたしたちには必要です。

そうでなければ、わたしたちは人間的な考えと、葛藤と失望の中に捕らえられたままです。神と出会う経験はわたしたちをそこから解放します。

神さま、わたしたちにも、たとえささやかであっても信仰的な霊的な経験をお与えください。自分で考え、自分で悩み、人と議論するだけではなく、ほんとうに神さまと交わることを経験させてください。神さまの声を聞こうとするわたしたちに、あなたによって動かされるわたしたちにしてください。わたしたちのために死んで復活されたイエス・キリストによってお願いいたします。アーメン